

診療放射線技師の未来を見据え…我々にできること

富田 博信

公益社団法人日本診療放射線技師会 副会長

私たち診療放射線技師には、医療環境のさまざまな変化により、果たすべき役割やスキルに対するニーズの拡大が想定されます。近年において、装置の性能は例外なく継続的に進歩しており、画像診断技術や放射線治療技術においても、高精度な画像やより効果的な治療法が求められています。さらに人工知能（AI）の活用によって、画像の解析や診断支援がさらに進化する可能性があり、診療放射線技師にはこれらのツールを適切に活用するスキルが求められることも想定されます。一方、私たちを取り巻く法令に目を向けると、医療法施行規則の改正により放射線被ばくの管理が具体的に規定されました。電離放射線障害防止規則改正では、眼の水晶体の線量限度が「5年間の平均で20ミリシーベルト/年、かつ、いずれの1年においても50ミリシーベルトを超えないこと」となり、大幅に低減されました。これにより、施設内での診療放射線技師には、患者（検査）の被ばく管理や放射線従事者の被ばく管理・教育にも期待が寄せられております。このような環境変化の中、「我々にできることは？」と考えた時、忙しい毎日の業務の中、臨床現場ではいかがでしょうか。最近、少し心配になることがあります…。



「ゆでガエル理論」をご存じでしょうか？これは、緩やかな環境変化の下においては、それに気付かず致命的な状況に陥りやすいという警句です。生きたカエルを、突然、熱湯に入れば飛び出して逃げるが、水に入れた状態で常温からゆっくり温度を上げると危険を察知できず、そのままゆでられて死んでしまうという説話に基づいています。この説話に関して科学的に、Victor Hutchison博士（Oklahoma大学）は「この説話は完全に誤りである」と述べております。これは研究によって、多くのカエル類における臨界最高温度の上限は判明しており、水が1分間に1℃加熱されるたびにカエルは逃げ出そうと活発になり、逃げ出せる環境であれば最終的に逃げ出すと説明しています。

私たちも、科学的な根拠をもって医療に貢献している診療放射線技師ですから、この説話のようなゆでガエルになってしまうのではなく、研究で証明された科学的なカエルのように、周りの環境変化にしっかり対応したいものです。

さて現在、令和3年厚生労働省告示第273号研修（告示研修）を全国47都道府県で開催いただいております。担当スタッフの皆さまには改めて感謝を申し上げます。この巻頭言を執筆している9月初旬において、全国医療施設に勤務する診療放射線技師の告示研修未受講率は、地域によるバラツキは大きいのですが、全国平均でおよそ70パーセントというデータが出ております。このような中、都市部においてはすぐに枠が一杯になり、申し込みがしづらい状況となっており、会員の皆さまにはご不便をお掛けしております。告示研修の受講はおおむね順調に進んでおり、ぜひ周りの診療放射線技師にもお声掛けいただき、多くの仲間が受講できるようご協力いただければありがたいです。施設内で忙しい業務の中、安全確保や人員調整など多くの課題があると思います。しかし今、新たな業務を積極的に受け入れることが、診療放射線技師の未来のために「我々にできること」の一つではないでしょうか。日本診療放射線技師会のスローガン「期待される診療放射線技師の役割に応えよう」につきまして、何とぞご理解ご支援のほど、お願い致します。